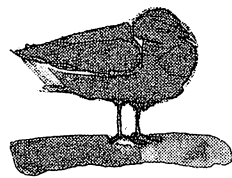


禪宗

平川 彰



「禪」は「ジャーナ」(Jhana)を音訳した言葉で、「静慮」(心を静めること)という意味です。これは「ヨーガ」(Yoga, 瑜珈)と同じ意味に使われています。ヨーガは「結びつける」という意味でして、心を対象に集中することをいいます。ジャーナもヨーガも、心を対象に集中し、精神を統一する方法を意味します。そしてこの心の統一した状態を「サマーディ」(三昧)といいます。サマーディは「等持」(心を等しく持する)と訳し、また「定」とも

訳します。心が三昧に住し、静まって、鏡のようになったとき、対象界が心にあるがままに映るのです。故に真理を発見するためには、心が三昧に住することが必要です。そしてさきの禪と、この定とを一つにして「禪定」とも言われています。

ともかく禪は精神を統一する方法ですから、結跏趺坐して安楽に坐るとか、呼吸を数えて心を統一するとか、あるいは白骨を観じて執著をはなれるとか等の「手段」をそな

えています。この禅の実習の結果、心が静まって、心が定を得ると、その定を得た心で法を観ずるのです。そして法の理解によって般若の智慧を強化し、煩惱を断じて悟りを実現せんとするのは、すなわち禅の実習によって心が静まっただけでは、悟りを得たとは言えないのです。これは中国の禅宗の場合も同じでして、禅宗と言っても、単に禅を実習するだけではないのでして、公案を参究し、法を觀じ、真理を探究する努力がふくまれているのです。この自覚がありませんと、禅を実習しても、そこに得られる寂靜



菩提達摩像

の味を楽しむだけに終わってしまいます。

しかし、釈尊の時代の禅は、静かな禅でありまして、心が定を得て寂靜になる段階を初禅・二禅・三禅・四禅の四つの段階に区別しています。そしてさらにその上に、空無辺処・識無辺処・無所有処・非想非々想処の四つの段階を説いています。そしてこのような「禅定を得た心」において、五蘊の無我を觀ずるとか、四念処を觀ずる、四聖諦を觀ずる、十二縁起を觀ずる等の「觀法」を修するのです。

しかし大乘佛教がおこりますと、原始佛教の觀法も引きつづき行われていますが、さらにその上に大乘独自の「動的な觀法」がおこっています。それは般若波羅蜜の実践はげしい修行でありますので、その烈しい修行を支える三昧は、どうしても氣力にあふれた、烈しい性格の禅とならざるを得なかつたのです。この六波羅蜜の修行を支える三昧を「首楞嚴三昧」(śūraṅgama-samādhi)と云いまして、「勇健三昧」と訳します。シューラ (śūra) というのは、勇氣のある戦士のごとくして、成佛という大望を持つ菩薩にたとえているのです。そのために菩薩には、烈しい修行をやりとげる「不撓不屈の氣力」が必要でして、この氣力を湧き起こさせる三昧が首楞嚴三昧です。般若経には

この首楞嚴三昧をはじめとする百八三昧が説かれています。

このほかにも大乘佛教の三昧には、阿弥陀佛を觀する「般舟三昧」や、法華經にもとづく法華三昧、華嚴經にもとづく華嚴三昧等が有名です。しかし大乘佛教の諸三昧の根底には、般若の空觀にもとづく「空の三昧」と、唯識佛敎にもとづく「唯識觀」とがつらぬいています。そして大乘の諸三昧の動的な性格は、空觀から出てくるものと考えます。

佛教は西紀前後のころからシルクロードをたどって、中国につたりました。佛教が中国の長安に伝わったのは西紀一世紀のころと言われています。さらに經典が翻譯されたのは西紀一五〇年ごろと見られています。それから数百年の間に、西域やインドから多くの佛敎僧が中国に來まして、法を伝えました。その中には、經典を翻譯した訳經僧も多かったのですが、その外に戒律を中心とする「僧徒の生活作法」を伝えた僧や、禪の実踐を伝えた人や、その他種々の僧がありました。そして禪宗を中国に伝えた菩提達摩も、これらの渡來僧の一人であったのです。

しかし達摩（達摩の摩のちには磨と書く）以外にも、

中国に禪を伝えた人は少なくありません。古くは西紀一五

〇年ごろに長安に來た安世高は、小乗の禪の經典を翻譯し、中国にインドの禪を紹介し、その実習方法も教えました。さらに大乘禪としては、四〇六年に長安に來た佛陀跋陀羅が有名です。彼は華嚴經を翻譯しましたが、同時に觀佛三昧經や禪經修行方便等を訳し、禪の実習をも伝えていました。その後、曇摩蜜多や佛陀跋陀・曇良耶舍などが中国に來て、禪法を伝えました。曇良耶舍は觀無量壽經を訳しましたが、禪が専門でして、一度入定すると七日定より起ったなかつたといえます。そして常に三昧正受をもって諸國を教化して回つたといえます。しかし彼等以外にも、中国に來た禪師は多いのでして、そして中国僧の中にも禪法にすぐれた僧が多数輩出しています。佛陀跋陀の弟子の慧光や道房・僧稠などが有名です。

中国に興つた禪宗は達摩の伝えた禪が中心であつたのですが、当時すでに中国に伝えられていた小乗の禪法や大乘の三昧の影響を受けたと考えられます。さらに老莊の道士たちも山に住して修行していましたが、彼等の思想や実践方法なども、中国の禪宗の發展に影響を与えたと考えてよいと思います。そこに、インドの禪とはニュアンスの違つ

た、中国独自の烈しい禪を説く禪宗が成立したのです。

菩提達摩は南インドの出身で、国王の第三子であったといひます。しかし波斯人であつたともいひます。彼は出家して大乘佛教を学びましたが、辺国に佛教を広めんとして中国に来ました。彼が中国に来たのは四七〇年ごろでして、南方の海路により中国南部に達しました。そして梁の武帝（五〇二―五四九在位）に面会して、問答をしたとも言われますが、これは史実でないようです。

その後、達摩は北方の魏の国に行つたと言ひますが、しかし禪を広めるのに機が熟してないと見て、嵩山の少林寺に退ぞき、面壁九年であつたと言われています。しかしその間、教えも説き、弟子を接得したのでしょうか。彼には「二入四行」の説があつたといわれ、弟子に慧可（僧可、四八七―五九二？）があり、禪宗の第二祖になります。その後、第三祖僧璨・第四祖道信・第五祖弘忍と次第して、とくに弘忍（六〇二―六七五）には「東山弘忍の十大弟子」がいわれ、弟子が多く、次第にこの系統が禪の主流になります。

とくに弘忍の弟子には神秀と慧能が出て、「南頓北漸」

というように、漸悟を説く神秀と頓悟を説く慧能（六三八―七二三）とによって、北宗と南宗に分れました。そして慧能の南宗が禪の主流になっていきます。或るとき師の弘忍から所見を呈せと言われて、神秀は「身体は悟りの樹であり、心は明鏡の台の如くである。たえず努力して磨き、塵埃をつけてはならない」と述べたのにたいし、慧能は「悟りに樹は要らず、明鏡にも台は無用である。心性は本来無一物であるのに、どこに塵埃のつく余地があるう」と所見を呈したといひます。

慧能は広東省の出身で、家が貧しく、若い時には市に薪

本格焼酎 さつま・かご・龍門滝
司 しま

さつま酒造株式会社

取締役社長 越智純一郎

住所 鹿児島県始良郡加治木町諏訪町二〇〇番地
〒八九九一五二
電話 〇九九五（六三）三一六一番

を売って生活していましたが、金剛般若経を誦するのを聞いて発心し、弘忍の門に入ったといえます。のち弘忍から東山法門の衣鉢を授けられ、故郷の曹溪山宝林寺に帰り、大いに禅風を挙揚しました。

慧能には嗣法の弟子が四十余人ありましたが、その中で、青原行思せいげんこうしの系統から曹洞宗や雲門宗がおこり、南嶽懷讓なんがくえいじやうの系統から洪州宗がおこりました。すなわち南嶽の弟子に馬祖道一があり、江西に化を布きましたが、その弟子に江西省の洪州百丈山に百丈懷海が現われ、禅院の生活規範を制定して、「百丈清規」しんぎを著わしました。この百丈の弟子に黄檗希運と瀉山の靈祐とがありまして、前者から臨済義玄が現われ、後者から仰山の慧叔が現われまして、黄檗宗・臨済宗・瀉仰宗などがおこりました。

このように青原行思と南嶽懷讓の系統にすぐれた禅者が現われまして、慧能の系統の禅が中唐以後盛大となりました。そして唐末の武宗の破佛をも乗り切って、禅宗の黄金時代を築きました。武宗の破佛で佛教が全体として衰運に向ったとき、禅宗だけが盛大になりましたのは、禅宗が中国的な佛教になっていたことと共に、朝廷や貴族の援助に頼らないで、山野に住して簡素な生活に堪え、作務を行っ

て自給自足の修行生活をしていたからです。有名な百丈清規は、この禅門の生活規範を示したのですが、その中には修行僧がすべて作務をなすことが述べられています。そのため老齢になった百丈が弟子のすすめで、止むなく作務を休んだとき、食事をとらず、「一日作さざれば、一日食らわず」と言ったことは有名であります。

このように禅宗教団が権門に媚びず、朝廷や貴族の経済的援助を受けなかったところに、彼等が自ら理想と信じた修行生活をなし得たのです。

達摩は楞伽経を必要しましたが、慧能は金剛経を重んじたといえます。しかし禅宗としてはとくに所依の經典はなく、故に「教外別伝、不立文字」とも説かれます。そして自己の悟りの体験を卒直に示すことが尊重され、そのため「語録」が作られるようになりました。このように祖師の語録を重んずる点から「祖師禅」とも言われました。

そして弟子の教育にも一定のきまりはなく、坐禅を中心としながらも、弟子の接得に「弘拳棒喝」が用いられました。そして無所得や無念・無心が尊ばれ、そして直ちに人間の心性を洞察して、「直指人心・見性成佛」を実現することが目的とされたのであります。

(東京大学名誉教授)